

私たちは小さい頃から、元寇について間違った事実を教え込まれてきたのではないか。我が国で最近出版された多くの文献や中国の文献などを読んで、そう感じる。結論から言うと、元寇の真相は日本侵略が真の目的ではない。世界帝国の建設を目指したフビライが、南宋を滅ぼす手段として、古来の中国の礼をもって日本に和親交流を求めようとした、執念の交渉のあらわれである。当時南宋と交流していた日本(北条氏)は、その申し出を完全に無視した。何らかの応答を示すべきではなかったか?

フビライは、日本通の趙彝(ちょうい)の進言を入れて日本と友好を結び、南宋を滅ぼそうと考えた(近攻遠親)。フビライは文章にすぐれた桃枢(ようすう)に国書(要請文)を書かせて、1266年(至元3年)から7回にわたって毎年日本へ招諭の使節団を送った。1266年の第1回使節の黒的(国防次官)と殷弘(文部次官)は高麗の巨済島まで来たものの、荒れ狂う大海原を見て怖気づいて帰国してしまった。フビライにこっぴどく怒れた彼らは、1267年第2回、1268年第3回、1269年の第4回と来日し太宰府に国書を提出したが、鎌倉幕府と朝廷間で長々と評定が続き、結局幕府は受け取らないで無視した。こうして1271年第5回使節、1272年第6回使節と、趙(ちょう)良(りょう)弼(ひつ)らに人を入れ替えて日本への招諭に努めたが、無視された。

フビライは脅しをかける必要を感じ、1274年、第一次日本遠征をした(文永の役)。総司令官キント(イラン人)のもと、900隻の艦船、兵と水手合わせて2.7万人(3万人との説もある)が出動し、対馬、壱岐、鷹島とそれぞれの防衛軍(守護代)を全滅させて、九州本土決戦となった(図-1)。

博多湾の長浜沖に結集・投錨した900隻の艦船から元軍は(図-2, 3)長浜に上陸し、長垂山を越え、生きの松原を通り、姪浜へと進撃する。さらに博多・箱崎と攻め上り箱崎宮を焼き払った後、太宰府を目指した。

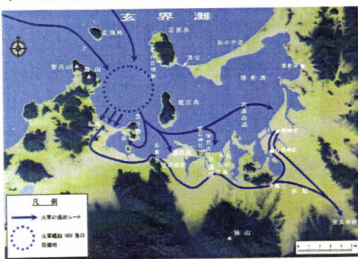


図-1 文永の役の元軍投錨地と進行ルート



図-2 長浜方面へ向かう900艘の元軍艦隊(CG提供:山田秋彦氏)



図-3 元軍艦隊近影(CH提供:山田秋彦氏)

ところが副司令官の劉復亨が負傷したため、キントは全軍に退却を命じた。高麗での治療が必要であったからだ。元軍が高麗に引き上げる途中、闇夜の玄界灘で強い季節風にあい、船同士がぶつかり合ったり、壱岐・対馬、高麗などの沿岸の岩礁に叩きつけられたりして、900隻中400隻、13500人が溺死し、戦死者2000人を加えると15000人が死亡した。それでも、元軍もフビライも一応の目的を達することができたとの認識であった。

文永の役翌年(1276)、フビライは第7回の招諭使節を派遣した。正使は文部次官の杜世忠、副使は国防局長の何文著という元朝の若いエリート達であった。使節団40人のうちこの2人を含む5人が鎌倉に送られ、北条時宗にフビライの意向を伝えた。時宗はその間一言も発せず、会話を終えると全員の手を縛るよう命じた。(1275年9月)太宰府に残っていた35人中一人だけは「杜世忠が処刑された」とのうわさを聞いて、日本を脱出してその事実を高麗へ伝えた。残りの34人は太宰府で処刑された。第8回の招諭の使節団は、この連絡を受ける前に、高麗の合浦を発っていた。幕府の命令で第8回使節団40人全員は、太宰府で処刑された。

幕府は、元軍の襲来を想定して博多湾に防壁を築かせた(図-4)。

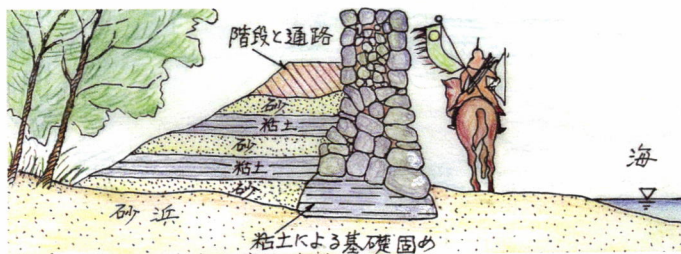


図-4 防壁断面図

フビライは2回も使節団を切り殺されたのを機に、第二次日本遠征を計画・実行した。南宋を滅ぼした(1276)後のことであり²、真の目的は日本との交流と、南宋兵の日本への植民であった。日本遠征軍を(1)東路軍(艦船900隻、兵士・水手42000人)と、(2)江南軍(種籾や農機具などを満載した艦船3500隻、兵士・水手142000人で、かつての南宋の兵を主とする)の二手に分かれて発進した。当初、壱岐で両軍が合流することになっていたが、計画変更後、平戸島で合流できたのは予定より1月遅れであった。江南軍より1ヶ月早く着いていた東路軍は博多湾をじっくり偵察したあと、十分な兵力があるため博多湾に進み(図-5)、防衛の手薄な志賀島と能古島(このしま)を占領し、志賀島両島間の海域で日本軍との激戦となった「弘安の役」。

それによって元軍にも犠牲者が数百人と増えたため、「江南軍との合流前に無理することはない」との判断で、鷹島まで後退して20日間何もしないで江南軍を待った。

6月末に142000人の江南軍と合流した。184000人も兵は、一か月もの間何もしないで待機した。日本側との話し合いの機会を作るためと考えられる。だが、日本からの返答は全くない。

「閏7月1日(太陽暦8月23日)、博多湾へ侵攻」の命が下り、狭い海域に4400隻の艦船が集まった。そこへ、超大型の台風が来襲し、東路軍19397人、江南軍10余万人が死亡した。後世わが国では、「神風が吹いた」と言われてきた。

元軍の第二次日本遠征は失敗であったのか? フビライはこの敗退にそれほど痛痒を感じなかった。新造の大型艦船はほとんど無事であったし、台風で沈んだのはほとんど旧南宋軍であって、不要な10万人の南宋兵を海に「捨てる」ことができたからだ。つまり、

- 1) 元寇は本質的に「寇」(侵略)目的ではない。
- 2) 日中(元朝と北条氏)間の国交交渉(フビライの南宋を滅ぼす手段としての、日本と組む交渉)である。
- 3) 毎年繰り返すフビライの「国書」を携えて交渉に臨んだ。しかし、北条時宗は5回の使節を無視した。それに対する脅しが、「文永の役」である。
- 4) 文永の役の後も7回、8回と使節団を派遣するも無視され、使節団は全員処刑されたため、4400隻の艦船と184000の兵もって再度脅しをかけて国交交渉を行わせようとした。これが「弘安の役」である。
- 5) 第一次遠征は強い季節風によって、また、第二次遠征は超大型台風によって大被害をうけた。これを後代日本は皇国史観から、「神風」と呼んだ。

これら「元寇」を通じて私たちは(1)2国間の友好のためには、両国の歴史についての正しい相互理解が必要であり、(2)歴史は史実を客観的に見、考え、(3)自国の都合のいいように理解してはならない。(4)それに、「加害者」と「被害者」とでは、同じ歴史的事実、受けとり方に違いがあることを認識する必要があると思う。

以上のことを、私はこの「元寇」の講演を通して正しく伝えたかったのである。

1. いまむら・りょうへい 理学博士、技術士 アジア航測株式会社 名誉フェロー、顧問、技師長 JICA派遣主要任地:フィリピン、中国黒竜江省、ポリビア、グアテマラ、ホンジュラス、インドネシア等
2. 南宋首都の無血開城が1276年で、南宋皇帝一族が完全に掃討されたのは1279年である。